

□柳田国男・安藤広太郎・盛永俊太郎他：『稲の日本史 上下（筑摩叢書 133, 134）』上：373 ページ、口絵 14、附図 2、850 円。下：355 ページ、口絵 2、附図 1、800 円。昭和 44 年 3 月および 7 月発行。この本の一部については以前に紹介したことがあったが、絶版になっていたのが 2 冊にまとめて再刊されたのを機会に改めて紹介しておきたい。日本人の生活と文化とは稲を切り離さなければ考えられぬ。しかもその稲が日本に野生しない植物であるから、その由来は日本史の展開の中に重大な鍵となることは当然であり、我々植物学の立場からみても見逃がせない関心事である。農学の立場から安藤・盛永等の諸氏と民俗・考古学の立場から柳田・松本等の諸氏とが稲作史研究会を組織し、主として討論を通じて稲の歴史を解明しようと試みたのが昭和 20 年代の終りであった。この会は会合を重ねて、種々の方面からこの問題にせまっていったがその速記録が整理されたものが本書で、もとは 5 冊であったが、2 冊に整理された。話題が提供され、それについて討論が行われており、一々結論は必ずしも出ていないけれども、じつに豊富な資料が縦横に駆使されているので、稲の本質と、日本の過去及び現在に占める稲の位置とその姿を如実に知ることができる重要な文献といえる。

主な目次を拾うとコモソインタレストとしての稲（安藤・柳田）、稲と水（柳田）、赤米（盛永）、日本稲の祖型（藤岡）、稲と言語（加藤・松本・馬淵）、古代の米（直良・佐藤）、日本稲作の起源と発達（安藤）、日本につながるアジアの稲（盛永）、朝鮮の稲作（永井）、稲作の慣行（早川）、弥生時代と稻作（杉原）、中国の稲作（天野）、インドシナの稲作（松本）、ゲノム構成から見た稲の野生種の類縁（盛永）、稲作と信仰（松本）などである。人文科学と自然科学との眞の総合研究といえる。

単なる植物学的な興味だけではなく、日本文化の原流としての稲について、正確な素養を身につけておくことの必要を痛感するが、それにはぜひ本書を読まれることをおすすめする。

（前川文夫）

□三宅 馨（訳）：『江戸と北京』、19×14、365 ページ。原著者肖像、挿図 20、横浜の当時の全景、15. 5. 1969、広川書店、価 1,200 円。幕末に英國から喜望峰を迂回して長崎に來り、さらに航程を江戸湾へのぼし、多くの園芸植物を集めて本国に送り、同国の園芸に貢献したので有名な Robert Fortune の紀行文である *Yedo and Peking* (1863) の全訳である。著者がわが国を訪れたたいせつな目的はアオキの雄本を手に入れて、彼地に雌本だけしかないと結実を見ないので、これに実を生らせるためであった。著者はその目的を達したかたわら、多くの園芸植物を集めることに成功をおさめた。その間、つぶさに当時の政情、人情、風俗、経済、気候等々を観察して興味ある記事をのこしていた。植物関係のものゝ内、横浜の寺院の名木コウヤマキを図入りで紹介し、のちにこの木が天然記念物に指定される端緒となった。書中には當時を示す挿図のほか横浜や江戸の古図がのっている。

（久内清孝）